



ふくおか【Good👍】農業人100

主な農産物／ブドウ(有核巨峰・無核巨峰・ピオーネ・デラウェア)他

# 原田 章典さん (32歳)

(営農地／八女市黒木町本分)

## 自ら作る仕事のスタイルには“やりがい”がある

《就農のきっかけ》

### やりがいを求めて仕事をしたい

元々実家が農家だった原田さんですが、地元八女の農業高校を卒業後は、一度、大川市にある家具販売店で働いていました。安定した現金収入のために選んだ道です。しかし、働く中で「サラリーマンとして頑張って、この歳でこのくらいか」と先が見えてしまい、「夢」や「やりがい」を持ってなくなったと言います。そのため、2年間働いた後、思い切って辞表を出して就農することを決意しました。幼少の頃から家で農作業を間近で見ていた原田さん、農業に対して面倒やきついなどという消極的な考えはなかったそうですが、休みが取れないという不安だけは持たれていたそうです。しかし、作型をずらしたり、計画的に作業を組んだり、実際農業を始めるとやり方次第で休みを取ることは可能だと感じているそうです。

《これまでの過程》

### “温故知新”で自分の農業技術を磨け

八女市黒木町は、全国有数の‘巨峰’の産地で、原田さんの実家も1.3haものブドウ畑を管理しています。今はブドウを上手に作りこなしている原田さんですが、就農してすぐの頃は「ずいぶん失敗もしたと言います。就農1年目に12aの園地をハダニにやられてしまい、例年10a当り1,500kg収穫していたブドウが800kgと半分ほどしか収穫できなかったことは、今でもはっきり覚えているそうです。原因は適期の防除ができなかったため、適期防除の重要性を痛感し、それから周囲のブドウ生産の先輩方や農協・県の指導員の話を中心に聞いて勉強するよう習慣付けられたそうです。就農した頃はすべて自由型長梢剪定で有核‘巨峰’を栽培しており、ハウス施設がない園も多くありました。しかし、現在では、省力化のために短梢剪定を取り入れ、「ピオーネ」や「デラウェア」などの品種を用いて全体の6割を無核栽培に切り替えました。さらに、電照栽培などの新技術を率先して導入することで、自分のブドウ作りに日々磨きをかけています。



プロフィール

■家族構成／父、母、本人、妻、姉 ■前職／会社員  
■営農年数／約12年 ■従業員数：／臨時雇用シルバー3名  
■耕作(経営)面積／ブドウ(1.3ha)、インゲン(4a) ■販路／JA共販

《これからの展望》

### 経営スタイルを改善して収益を上げる

今後の目標を聞いた際に「人間的に男前になる!」とニコッと答えた原田さん、続けてブドウ生産に対する抱負を話してくれました。「現在6割の短梢剪定による無核ブドウ栽培を8～9割に拡大したり、各品種にとって高い単価の出荷時期に合わせた作型を徹底するなど、「収量・収益・省力化」のバランスを考えた自分なりの経営スタイルを確立したい。」とのことでした。また、新技術を取り入れるには導入コスト、技術の検討および失敗の可能性などのリスクが伴いますが、気持ちを縮こまらせずに新しいことにチャレンジすることが大切だと考えているそうです。最後に、「毎日汗をかいて働いているのだから、年収では一般的なサラリーマンには負けたくないという気持ちでいつも頑張っているよ。」とサラリーマンを経験した原田さんならではの意気込みを聞かせてくれました。



### Good👍 成功のためのポイント

最新・流行りの技術を使って成功する人もいれば、失敗ばかりする人もいます。新しいことには率先して取り組むべきですが、土台の基礎なしで応用は成功しません。まずは、周囲の生産者仲間と同等のレベルを目指し、「人並み」の農業ができるようになることが先決です。